

PRAEVIDENTIA DAILY (2月26日)

昨日までの世界：ポンドが息を吹き返す

昨日は、主要通貨は材料が少ない中で全体として強い方向感がない小動きとなったが、中ではポンド、スイスフラン、円が対ドルで上昇した一方、カナダドルや豪ドルが前日の大幅上昇の後で反落したかたちとなった。ポンドは、英 BBA 住宅ローン承認件数が 4.9972 万件と前月および市場予想を大きく上回ったことなどから堅調な動きとなり、ポンド/ドル相場は 1.66 ドル台半ばから一時 1.6727 ドルと 1.67 ドル台を回復する局面がみられた。ドル/円相場は、欧州時間以降降り安傾向となり、米消費者信頼感指数も 78.1 と前月および市場予想を下回る結果になると米長期債利回りの低下と共にドル/円は一時 102.01 円と 102 円割れぎりぎりの水準まで下落した。

この間、新興国通貨では南アランドが続伸した一方、トルコリラやロシアルーブルなどが下落するなどまちまちの動きとなった。南アでは 4Q GDP が発表され、前期比年率計数が +3.8% と前期の +0.7%、市場予想の +3.4% を上回ったことも好感されたようだ。他方、トルコでは、Erdogan 首相の資金隠し疑惑を巡る退陣要求などが嫌気された模様で前日に続き続落している。またウクライナでは、25 日に予定されていた挙国一致内閣発足が 27 日に延期されたことやロシア財務次官がウクライナのデフォルトリスクを下記したこと等から通貨フリブナが下落、ロシアルーブルにも悪影響を与えているようだ。

主要通貨ペアの前営業日比変化率と、連動性が高い金利・株価・商品市況の変化

	変化率	米日2年金利差	米2年金利	日2年金利	米日10年金利差	米10年金利	日10年金利	米株価	日株価	原油WTI	原油Brent
ドル/円	-0.3	-0.01	-0.00	+0.00	-0.03	-0.04	-0.00	-0.1	+1.4	-1.0	-1.0
	変化率	独米2年金利差	独2年金利	米2年金利	独米10年金利差	独10年金利	米10年金利	欧株価	米株価	原油Brent	西伊の対独格差
ユーロ/ドル	+0.1	-0.00	-0.01	-0.00	+0.00	-0.03	-0.04	+0.0	-0.1	-1.0	+0.01
	変化率	英米2年金利差	英2年金利	米2年金利	英米10年金利差	英10年金利	米10年金利	英株価	米株価		
ポンド/ドル	+0.2	+0.01	+0.01	-0.00	+0.01	-0.03	-0.04	-0.5	-0.1		
	変化率	豪米2年金利差	豪2年金利	米2年金利	豪米10年金利差	豪10年金利	米10年金利	米株価	中国株価	CRB	
豪ドル/米ドル	-0.2	+0.00	-0.00	-0.00	+0.03	-0.01	-0.04	-0.1	-2.0	-0.2	
	変化率	NZ-米2年金利差	NZ2年金利	米2年金利	NZ-米10年金利差	NZ10年金利	米10年金利	米株価	中国株価	CRB	
NZドル/米ドル	+0.1	+0.01	+0.00	-0.00	+0.03	-0.00	-0.04	-0.1	-2.0	-0.2	
	変化率	米加2年金利差	米2年金利	加2年金利	米加10年金利差	米10年金利	加10年金利	米株価	原油WTI	CRB	
米ドル/加ドル	+0.2	-0.00	-0.00	-0.00	-0.00	-0.04	-0.04	-0.1	-1.0	-0.2	

(注) 為替相場、株価および商品価格は前営業日比変化率、金利は前営業日比変化幅(%ポイント)。

きょうの高慢な偏見：3月の季節的円安を円買い機会に

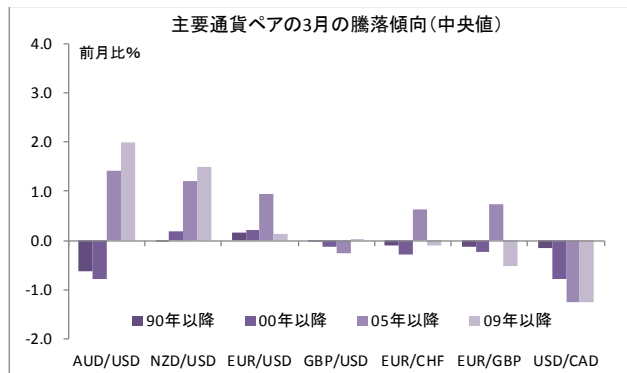
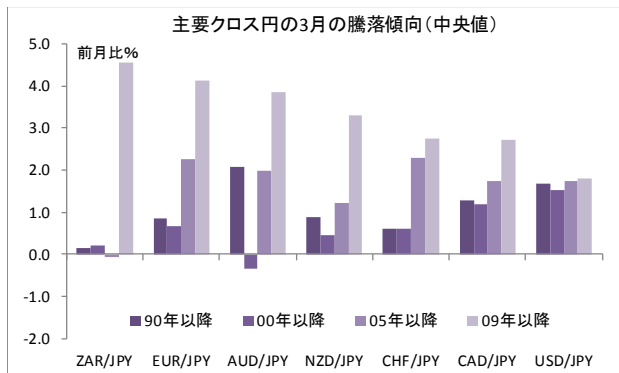
本日の指標、イベント	時刻	前期	市場予想	備考
Broadbent・BoE 金融政策委員発言	18:25			
Mersch・ECB 理事発言	22:00			
米1月新築住宅販売件数	0:00	41.4 万件	40.0 万件	予想通りだと3か月連続減
Rosengren ポストン連銀総裁発言	2:00			ややハト派、投票権なし
NZ1月貿易収支	6:45	5.23 億 NZ ドル	2.30 億 NZ ドル	
ブラジル中銀金融政策決定・SELIC		10.50%	10.75%	時刻未定。前回は7:05分

(出所) プレビデンティア・ストラテジー作成

本日も比較的材料は少なく、ドル/円では米新築住宅販売件数位しかない。先日の中古住宅販売件数と同様に、米国の住宅関連指標はこのところ回復傾向に一服感がみられており、本日の新築住宅販売件数も市場予想通り前月から減少するようだ、3か月連続の減少となる。米国の経済指標は悪化だが悪天候の影響もあり一時的では、という意味での緩やかなドル安圧力と、アベノミクスはかつてほどの輝きはないにせよ、4Q GDP が弱

かったし消費増税の悪影響もあるしCPI2%達成は容易ではないので、いずれ日銀は追加緩和するだろう、という意味での緩やかな円安圧力が拮抗して、足許の方向感が出ない101-103円でのレンジ相場が続いている。

材料が比較的少ないため少し先を展望すると、来週3月は季節的にドル/円が上昇し易い月だ。機関投資家の為替ヘッジ操作、新年度に向けた新規対外投資開始期待、などが言われているが決め手はなく、敢えて言えばドル/円相場と連動性が高い米10年債利回りや米株価も、3月は上昇する傾向がみられている（当社ウェブサイト：経済金融情報/為替相場分析/季節性/[ドル/円・米10年債利回り・米株価](#)を参照）。足許は米経済指標の軟調や新興国市場の動揺もあって米長期債利回りの低下と共にドル/円は上がりにくい状況が続いているが、3月に入り米国で2月分の統計が始め、悪化が一服を見せ始めるようだと、ドル/円は季節風に乗って105円程度まで上昇する可能性が出てくる。なお、主要通貨ペアおよび主要クロス円相場全般についても季節性をみると（[下図を参照](#)）、米ドル/カナダドル相場も比較的安定した下落傾向（カナダドル高）傾向があるが-1%強とドル/円の+2%ほど変動率が大きくなく、またカナダドル/円の季節性をみると確かに最近では+2%台後半とドル/円より上昇率が大きいのが、ドル/円ほど安定的ではないようだ。



もっとも、その後も順風満帆に110円へ続伸するかというそうはなりにくく、4月以降は季節的上昇が剥落すること、現在市場では殆どそうした期待は消滅しているが日本の貿易収支がJカーブ効果もあって改善に向かうとみられること、日銀は余程のことがない限り少なくとも4月の段階では追加緩和に踏み切らないこと、などを考えると、ドル/円は3月をピークに4月以降反落に向かう可能性が高い。このため、3月の季節性を狙ったドル/円ロングは慎重に利食い機会を窺うべきで、トルコで選挙が行われる3月30日までに材料がなくても上がる相場に戻っていないようであれば、戻り売り開始となる。

ディスクレーマー

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、全てお客様ご自身でご判断下さいますようお願い申し上げます。
 当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。
 当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。当資料は購読者向けに送付されたものであり、購読者以外への転送を禁じます。

プレビデンティア・ストラテジー株式会社
 金融商品取引業者（投資助言・代理業）関東財務局長（金商）第2733号
 一般社団法人 日本投資顧問業協会 会員番号 012-02641